



Title	もう食べたくない
Author(s)	鷺田, 清一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1998, 2, p. 96-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

もう食べたくない

鷺田清一

口はいそがしい器官だ。

呼吸する、食べる、飲む、しゃぶる、唾を吐く、指をなめる、糸を噛み切る、物をくわえる、乳房にかじりつく、唇を合わせる、そして話す。まるで、いのちがそこに凝集しているみたい。

だからだろうか、いのちのぎくしゃく、いのちの不安定は、ほとんどなんらかのかたちでこの場所におよんでくる。息を吸いすぎて過換気症にはまる、過食や拒食におちいる、極端な早食いになる、爪や鉛筆を噛みちぎる、憑かれたように話しつづける……。わたしもこのところ、早食いがひどくなっているらしく、ちょっと気にはなっている。

過食とか拒食というのは、思春期の女性に特徴的なものかと思っていたら、このごろは、出産後、育児で悩む女性にもこういう摂食障害がめだってきていると、どこかで読んだおぼえがある。食べることもうひとつ（夫との）性的関係という、人間における〈自然〉のふたつの位相で、トラブルが起こっているらしい。

食べるといえば、食べるものと食べられるもの、つまりは単体としての生き物と自然環境の関係としてイメージしやすいが、ほんとうは他人との関係のなかに深く根ざした行為なのではないかと思うことが、よくある。

大学に勤めているので、二十歳前後のひととしゃべる機会がすくなくないが、独り暮らしをしている学生のかなりの部分が一日一食ですましているというのにはおどろく。寝る時間が一定しないので、いつともなくなにかを適当に口に入れておいて、あと、ちゃんと食事をするのが一日に一回ということになるらしい。女子学生のばあいだと、買い置きのものでちょっと二、三分ですませたり、歩きもってカロリーメイトなんかをほおぼるだけで食事完了というの、めずらしくないらしい。

若いときに軽い過食症を経験したことのある女性の編集者が、じぶんを例に、こんな解釈をしてくれた。独り暮らしをしていると、なにか口にポイッと入れて数秒で終わりということもあれば、だらだらといつまでも食べつづけていることもある。そんなことをくりかえしているうちに、食事というものがいつ始まりいつ終わるの

か、はっきりしなくなる。それで、満ち足りたという感覚がやってこず、結局は物理的な膨満感がおとずれるまで、つまり食べられなくなるまで食べつづけるのだという。

そこに欠けているのは食事の「段取り」というものだ、と彼女は言った。他人といっしょにいと、食べたくなくても一応食卓にはつかないといけないし、すると惰性的にでもなにかを口にふくむ。いや惰性的というより、ほんとに食欲がじわーっとわいてくる。

階下で湯の煮立つ音や包丁で刻む音が聞こえてきて、それにあわせてからだももぞもぞだし、食べたらず食べたで、（お行儀がわるいが）「もう、おなかいっぱい」などと言いながらどた一とうしろにころがる……といった段取りがあって、知らないあいだにものがちゃんとからだのなかに入っているというのだ。

そういえば霊長類学の山際寿一さんが、「食べる社会性」と題したエッセイのなかで、食物をその場で摂取せず、仲間のもとに持ち帰ってみなと一緒に食べるというのが、食という点で人間をサルから分かつ唯一の特徴だと書いておられた。ファストフードの店で出来合いの食物を買って、めいめいが勝手に食べるさまを見ると、なにか人間の進化を逆行しているように見えてしまう、と。

でも、悲しいかな、戻るにも戻る〈自然〉そのものもすでに壊れているのが、人間だ。だから〈自然〉に戻ろうとして、方向喪失におちいり、逆に〈自然〉からもっとも逸脱した行為へと走ってしまいもある。食欲そのものの消失、あるいは過食と拒食。じぶんでじぶんの体を攻撃してしまうのだ。最初からだがダメージを受けてしまうのだ。

食べるという行為そのものが、自己にたいする暴力となりうる。食べることで、あるいは食べることを拒否することで、ひとはなにを破壊しようとしているのか。なにを贖おうとしているのか。

そういえば、若いひとたちから年配のひとにいま確実に広がりつつあるピアッシング。身体に穴を開け、金属をそこに差し込むこの習俗が、縄文以来という、じつに長い忘却のあとでいま甦りつつある。みずからの身体を毀損することでしか手に入れることのできないものとは、いったいなにか。ここにもおそらくおなじ問題がある。

わたしたちは〈自然〉に深くじぶんを委ねるという事態を待ち望んでいるのか、それとも〈自然〉からじぶんを最終的に解除しがっているのか。〈自然〉の懷をもとめてさまよいつづけているのか、〈自然〉というじぶんの存在条件を、まるで

服でも脱ぐように、消去しがっているのか。ともあれ、多くのひとたちが、じぶんの〈自然〉を傷つけることなしにじぶんの存在を確認しえなくなっているというのは、どうもたしかなようだ。

（『群像』1997年8月号）